牧野義雄とロンドン(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2012-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丸山, 孝男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13077

明治大学教養論集　通巻328号
(2000・1) pp. 1—14

牧野義雄とロンドン (1)

丸　山　孝　男

1　はじめに

時は，1897年（明治30年）12月８日のこと。ある若い日本人の画家の卵がパリからロンドンに到着した。その名は牧野義雄。それから３年後の1900年（明治33年）10月28日，やはりパリ経由で，漱石こと夏目金之介がロンドンに到着した。このとき漱石は33歳。牧野は28歳になろうとしていた。

漱石の場合には，文部省から支給される生活費が十分ではなかったにせよ，少なくとも文部省派遣の国費による留学生として最低限度の生活は保障されていた。だからこそ，生活費を切り詰めるために下宿先を転々と変えたとはいえ，大量の書籍を買うことができたのである。また，旧制高等学校教授の留学制度が初めて設けられ，本人がそれほど乗り気ではなかったとはいえ，その第一期生に選ばれたという自負の念もあったに違いない。なにしろ，洋行が夢のまた夢という時代であったのだから。

だが，牧野義雄の場合には，まったく事情が違っていた。牧野がロンドンに到着したときの持ち物は小さなバッグひとつだけ。所持金は40フランのみ。バッグのなかには，ワイシャツ１枚，ワイシャツのカラー３本，ソックス二足，ネクタイ１本，それにドイツ語版の「聖書」と仏教の哲学書が各１冊入っていた。牧野の持ち物があまりにも少なかったため，税関の役人はひどく驚いたようすだったという。

19世紀後半から20世紀初頭にかけて，「世界の工場」といわれ，陽の沈むことなき空前の繁栄を謳歌する大英帝国。黄金時代ともいわれた，その首都

ロンドンで同時代を過ごした二人だが，漱石と牧野とでは，ロンドンでの生活の仕方，受け取り方，受容の仕方がまるで違う。

漱石の一方的な被害妄想かもしれないし，人の体験談というのは字面だけを追って単純に解釈してはいけないのかもしれないが，2年間におよんだ留学生活をふりかえって，漱石はいう。

> 倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあって狼群に伍する一匹のむく犬の如く，あはれなる生活を営みたり。倫敦の人口は五百万と聞く。五十万粒の油のなかに，一滴の水となって辛うじて露命を繋げるは余が当時の状態なりといふ事を断言して憚らず。(1)

ところが，牧野義雄の場合には国費による留学生でもなければ，経済的に援助してくれる人がいたわけでもなかった。つまり，最初からロンドンでの生活の当ても保障もまったくなかったのである。前述したように，所持金もほとんどなし。着の身着のまま，それこそ裸一貫でロンドンに到着したのである。

だが，牧野は食うや食わずの極貧の生活を強いられながらもロンドンに着くやいなや，ロンドンの風景，街並，建物，雰囲気，英国人気質などに魅了されてしまい，たちまちその虜になってしまう。ロンドンに暮らして10年ちかくたったころ，旅行はおろか相変わらず毎日の食費にさえこと欠いていたにもかかわらず，牧野はいう。

> The summer of 1906 was extraordinary hot. All my friends had left Town, but my poverty made me obliged to stay in London all the while. However, I envied nobody, because I love London so much. I have been staying here over nine years, and yet not a single day have I felt tired of London. Every day I go out, and every day I bring back some fresh impressions.(2)

「ロンドンが退屈だと感じたことは1日とてなく，毎日，出歩くたびに新鮮で新たなる感銘を受ける」とは，ロンドンを語るときに必ずといっていいほど引用される，サミュエル・ジョンソン博士のあまりにも有名な言葉，「ロンドンに飽きたら，人生に飽きたということなのだ。なぜなら，ロンドンには人生の与えうるすべてがあるから。」を彷彿させるではないか。

このとき牧野は，ジョンソン博士の言葉をすでに知っていたか，あるいは意識していたかどうかなどということはどうでもいいことで，さしたる問題ではない。大事なことは，ロンドンに魅了され，その虜になってしまった牧野は，内容的にはジョンソン博士とまったく同じことをいっているのである。

ロンドンの風景のなかで，画家の卵，牧野の心を捉えたのは霧だった。霧にけむるロンドンの風景，街並こそが，牧野にとって絵の決定的なモチーフであり，対象になったのである。そして，はやくもロンドンに永住を決意する。

> Indeed the London mist attracts me so that I do not feel I could live in any other place but London.(3)

この当時のロンドンの霧というのは，実際には歌や詩にあるようなロマンティックで，叙情をそそられるような霧ではない。冬には一般家庭や工場のほとんどが，暖房には石炭を使用していたから，もうもうとした黒い石炭の煙が空高く舞い上がり，濃霧とまじって黄色い煙のようなスモッグとなった。街を歩いていても身体は汚れ，鼻をつくような異様な匂いがしたであろう。

スモッグが低く垂れこめ，ひどい日には視界が遮られて，1メートル先でさえも霞んで見えたり，あるいはまったく見えなかったこともあったという。おまけに，窓を閉めてもその隙間からスモッグは部屋のなかに容赦なく入ってきた。

これらのスモッグが不愉快きわまりなく，身体にいいはずはない。膨張に膨張を続け，発展の一途をたどり空前の繁栄を謳歌したロンドンの街並とは裏腹に，当時のスモッグがいかにひどいものであったか，漱石は1901年1月4日付の「日記」で，こう苦言を呈している。

> 倫敦ノ街ヲ散歩シテ　試ミニ啖ヲ吐キテ見ヨ　真黒ナル塊リノ出ルニ驚クベシ　何百万ノ市民ハ　此煤煙ト此塵埃ヲ吸収シテ　毎日彼等ノ肺臓ヲ染メツツアルナリ　我ナガラ鼻ヲカミ　啖ヲスルトキハ　気ノヒケル程気味悪キナリ(4)

ところが，牧野にとっては冬のいちばんスモッグのひどい時期こそが創作意欲をかきたてられ，魅力的だったのである。霧でくすんで見えるロンドンの風景や街並が，牧野にとっては幻想的で神秘的とさえ感じられたのだ。多くの人が嫌うロンドンの冬，ロンドンの霧を牧野は手放しで絶賛する。

> December is my favourite month in London. The volume of thick mist which covers the whole town mystifies every view in a most picturesque way. The wet pavements reflect everything as if the whole city was built on a lake. The ladies are generally in furs. These are already quite enough to make me enjoy the cold. But, moreover, to add to my delight, the Christmas is coming!(5)

描写が生き生きとしており，まるで絵に描いたような牧野の文章だ。同じ日本人で年令の差もあまりなく，同じ時代をロンドンで過ごした二人だが，文学者と画家との間では霧ひとつとってみても，その受け取り方がこうも違うのである。このとき漱石は，一生活者として霧に対する感想を率直に述べたのであろうが，この当時，イギリス人を含めて，ほとんどの人たちが漱石と同じように考えたであろう。

のちに，牧野は「霧の画家」と呼ばれるようになるのだが，その萌芽が霧というものの捉え方にあったに違いない。ロンドンの霧の色に絵心をそそら

れたに違いない。

もとより，この小論の目的は夏目漱石と牧野義雄とのロンドンでの日常生活を比較検討することではない。文学者と画家との比較研究でもない。漱石と牧野とでは，最初からロンドン滞在の目的が違っていたのである。

この小論の主たる目的は，牧野義雄とロンドンとの関わり，牧野が遺した数多くのロンドンの風景，街角の絵をもとに当時のロンドンの雰囲気，日常生活，社会事情などを検証することである。併せて，当時のロンドンの社会事情と現代の社会事情とを比較検討することでもある。

2　牧野義雄とは

日本人で夏目漱石の名を知らない人はいないであろう。小学生や中学生でも知っていよう。ましてや，漱石は千円札の肖像画にもなっている。

それに反して，牧野義雄はどうであろうか。日本人といえども，その名を知っている人の数はかなり限られよう。その証拠に，日本で発行されている百科事典や美術関係の事典でさえ，牧野の名が掲載されているものはほとんどない。

ところが，ロンドンでは事情が違ってくる。とくに年配の古書店主に，「牧野義雄の本を探しているのですが」と尋ねると，「牧野は今世紀前半，英国で大活躍した著名な日本人の画家です。英文による著作もたくさんあります。でも，現代では入手がきわめて困難でしょう。」という返事がかえってくることがあるのだ。

これには，訳がある。まさに今世紀前半，国籍を問わず，ロンドンの街並に魅了され，それを描く画家は多数いたにもかかわらず，とくに霧にけむるロンドンの光景，街並を描かせたら，牧野の右にでる者はいないといわれ，時の人どころか，一躍時代の寵児になったのだ。いっときロンドンの社交界では，話題が「牧野のことではじまり，牧野のことで終わった」というから

驚きだ。

ロンドン漱石記念館館長・恒松郁生氏による調査によれば，牧野義雄の名前が英国名士録 *WHO'S WHO* に，1918年から1949年までの長きにわたって掲載されているという。また，イギリスの新聞社『デイリー・メイル』が発行する，1919年版の年鑑には世界の名士1000人が入っており，そのなかに5人の日本人が選ばれているが，まず最初に天皇陛下，次に東郷平八郎海軍大将と大隈重信侯爵，それに当時の駐英大使である珍田捨己，そして5人目には，なんと画家として牧野義雄の名が載っているという。(6)

ここで牧野義雄の略歴を紹介しておこう。

1869年（明治2年）12月25日，牧野義雄は牧野利幹の次男として挙母村（現在の愛知県豊田市）に生まれた。挙母村小学校高等科を卒業し，小学校の教員をやりながら英語，漢学，西洋式鉛筆画などを学習する。

23歳のときに，英語の物書きか詩人になりたいと思って，家出同然で渡米を決意し，サンフランシスコに向かう。

だが，アメリカの友人たちに日本人が英語による物書きになるのは無理だといわれ，画家になれとすすめられる。皿洗い，窓拭き，床掃除，ハウス・ボーイなどのアルバイトをやりながらホプキンズ美術学校に入学するが，日々の生活に追われ，学校に行けたのは1年足らずだった。

それに，当時は日本人に対する人種差別がひどかった。日本人に対しては人権もなにもなかったといっていい。牧野が路を歩いていると，石や煉瓦を投げつけられ，サンフランシスコに4年間滞在したが，恐ろしくて一度も公園などにはでかけなかったという。

あるとき海岸で絵を描いていると，数人の若者が寄ってきてカンバスをずたずたに引き裂き，絵具と筆を海に投げ捨てて逃げ去ったという。これらの絵具は，画家になる夢を抱いて，牧野が3カ月も4カ月も苛酷なアルバイトをしてやっと手に入れたものだった。

悔しいというよりは，それをとおり越してあまりにも情けなかったのであ

ろう。牧野はその場で何時間も泣きつづけた。

こんなわけで，サンフランシスコでの生活に見切りをつけ，ニューヨーク，パリを転々としながらも知人の誘いもあって，牧野は最終的にはロンドン行きを決意する。

牧野がはじめてロンドンの土を踏んだ背景には，このような事情があった。画家になるという牧野の将来の夢の前には，最初から大きな壁が立ちはだかっていたのである。

3　ロンドンでの生活のはじまり

前述したように，牧野のロンドンでの生活は，なにひとつ保障されたものではなかったが，ロンドンに着くやいなや，その虜になってしまう。

まず，牧野はハイド・パーク，グリーン・パーク，セント・ジェームス・パークなどの公園を恐る恐る散歩する。どれもこれも広々としていて，ロンドンの代表的な公園だ。サンフランシスコとは違って，誰からも石を投げつけられないし，罵倒されることもない。ましてや，唾を吐きかけられることもない。

それどころか，散歩中，身体と身体が少し当たっただけで，見知らぬ相手が帽子に手をあてて丁寧に謝ることに牧野は驚き，そして感心する。

最初は，このことが半信半疑で路行く人たちが自分のことを白い眼で見たり，罵倒しないのは，自分が日本人であることがわからないからだと思い，牧野はわざわざ黒髪を見せるために帽子を取るが，それでも唾を吐きかけたり，罵倒してくる人は誰ひとりとしていない。誰も牧野のことなど気にかけないのだ。

牧野は，まるでこの世の楽園にでも来たかのような気持ちになる。ときには，ロンドンでの生活が夢なのか現実なのか判断がつかないこともあった。カリフォルニアでの悪夢のような生活が脳裏から離れなかったのだ。このと

きの心境を牧野は「自叙伝」のなかで，こう回想している。

> Perhaps nobody could ever imagine my most grateful feeling at this moment, except those of my fellow-country friends who were in California once. Even now, after some thirteen years' stay in London, I often have nightmares of California, and wake up in midnight and wonder where I really am. When I realise that I am in London I feel so happy.
>
> In the streets first thing I noticed was so many silk hats. Then those people who were walking seemed to me so gentle, and with very dignified manners. Indeed, in California you cannot walk one block without hearing swearings. Here you hear apologising words instead.(7)

人種差別がことのほか激しかったサンフランシスコでの生活とはまったく違い，人々は親切で，表情は穏やかで余裕があり，まさにロンドンは別天地だった。牧野がロンドンに来て，歴史の偶然とはいえ，5年後の1902年に日英同盟が結ばれるが，両国の友好関係からして，このことも牧野にとっては幸運というか，とても幸せなことであった。

ロンドンの街を歩いていて，見知らぬ英国海軍の水兵に会い，両国の同盟のために近くのパブで祝杯をあげたこともあった。まさに古き良き時代であったのだ。

だが，人種差別はなかったものの，経済的には苦難の生活を強いられたことには変わりがない。家出同然で日本を出てきた牧野は美術学校に通う授業料だけでなく，生活費のすべてを自分で稼ぎ出さなければならなかった。

在英日本公使館の造船監督事務所で働いたり，美術学校でモデルをやったりしながらゴールドスミス美術学校，ロンドン中央美術学校などに通う。生活費のためには，墓石屋でデザインの仕事をしたりしたこともあったが，牧野の描く天使は天使というより，まるでバレエのダンサーのようだといわれ，せっかくみつけた仕事もわずか3カ月間で解雇されてしまう。

空腹の日々はつづいた。交通費がなく，一日何時間でもロンドンの街を歩

いた。昼食のかわりに公園で水を飲み，夕食をとらずにベッドにもぐりこまざるをえない日がざらにあった。空腹が度を越し，極限状況に追いやられ生死の間をさまようと，人はどのような反応を示すか，牧野は告白する。

> When one gets too hungry one's nerves always get sharper. My head was too clear to sleep. I tried not to move quickly, as that made me still more hungry.(8)

だが，牧野にとって悪いことばかりではなかった。牧野はロンドンでの下宿先を転々と変えたが，どの下宿先も牧野にはとても親切であったのである。部屋代，食事代を何カ月分も滞納しても，催促などはせずに大目にみてくれた。何カ月も待ってくれた。自分たちの食物を惜しみなく与えてくれたりもした。家主によっては，自分たちも借家人であり，かなり貧しかったにもかかわらず。

逆に，家主は「あなたはとても勤勉で，誠実で正直な人です。そのうち，神様が助けてくださる。将来きっと成功する」といって，極貧の牧野を鼓舞し，激励したのだ。このこともまた古き良き時代の名残かもしれない。誠実で几帳面な牧野は少しでもお金の工面がつくと，借金は必ずきちっと返したのである。

このように，極貧の生活を強いられながらも，牧野は絵やデッサンを売り歩く。牧野のやり方はこうだ。

街を歩いていて壁に貼られたポスターを見つけると，そのポスターの印刷屋の名前を捜し出し，図書館へ行って印刷屋の住所を調べる。そして，絵やデッサンを売り込む。いわば，飛び込みのセールスだ。

印刷屋によっては実用的な絵を何枚か買ってくれるところもあったが，だいたいは，どこへ行っても断られ徒労におわった。

ときにはシティまで出掛け，売るためのスケッチやデッサンをもって足が棒になるまで出版社を訪ね歩くが，なんの成果もなく徒労におわることが多

かった。雨の日も風の日も毎日歩き回るので，靴はすっかりすり切れてしまい，しまいには穴のあいた靴下がまる見えになったという。編集者が絵を見るまえに牧野の靴を見ただけで，そっけなく絵の購入を断ったこともあったという。

ロンドンでのどん底生活。牧野の失意の日々はつづく。出版社が牧野の絵やスケッチを受け取ってもなかなか出版してくれなかったり，たとえ本の挿入絵に採用してくれてもお金を支払ってもらえないことのほうが多かった。

たまにはスケッチが雑誌に掲載され，なにがしの印税が入ることはあっても，生活費にはほどとおかった。牧野は収入の道が途絶えるたびに，空腹に耐えながらどんな仕事であれ，たとえ召使であれ，窓拭きであれ，とにかく仕事をもっている人たちを羨ましく思うのである。

> Then my pocket began to be dead silent again. How much I envied those who had any sort of to make livelihood. Even the domestic servants were my great envy![9]

この悲痛な叫び声ともいえる牧野の言葉には，毎日の満足な食事にもありつけず，生活の辛苦をなめた者，ギリギリの状態まで追い詰められた者，地獄の底を見た者にしかわからない実感がこもっている。

残酷にも，生活苦が画家になるという牧野の野望を粉々に打ち砕いていく。牧野の心を容赦なくむしばんでいく。極度の貧困が牧野の人間としての最低限度の誇り，自尊心までをもへし折り，虚無感をうえつける。この世での存在の意義そのものを否定する。しまいには，かすかな希望の光でさえも打ち消していく。

貧困を恐れず，精神力が強靱な牧野だが，生活そのものに疲れ生きていくことに虚しさを感じ，ついに自殺を決意する。

> With such fruitless task day after day I was much discouraged, and moreover I was so disappointed with this false and faithless world. One

morning I quite decided to commit suicide, if that day's task were fruitless again. Though I was such a quite worthless little man, and it would make no difference whatever to the world whether I died or lived, it was something for me to die. It could not be a joke to me, I was in such a serious mood.[10]

4　スピルマンとの出会い

だが，この世には捨てる神あれば，救いの神もある。どんな人にも，この世には出会いというものがある。もちろん，不幸で惨めな結果におわる出会いもあれば，人生の一大転機になる幸運な出会いもある。

幸いにも牧野の場合には，後者だった。やはり，親切な下宿屋のおばさんがいみじくも予言したように，「神は牧野を見捨てなかった」のである。はじめて，幸運の女神が牧野に向かって微笑んだのである。

牧野は，まさに生きるか死ぬかの瀬戸際にたたされ，最後の望みをかけて，キャセルズ社が発行していた，芸術関係の高級雑誌『マガジン・オブ・アート』の門を叩くことを決意する。牧野はこれまで，この雑誌社だけには一度も絵やスケッチを持ち込んだことはなかった。

理由は，『マガジン・オブ・アート』が当代超一流の高級雑誌であるということと，一般に，芸術雑誌は芸術家を相手にしてくれないという話を聞いていたので，牧野のほうが躊躇していたのである。牧野は恐ろしいほどに控えめで，謙虚な人物でもあった。

社に一歩一歩近づくごとに希望と絶望が交錯し，牧野の胸は高鳴る。期待と不安が頭をかすめる。社に着くと，小さな接客室に案内された。まもなく副編集長がやってきて，牧野の画帳を受け取り，編集長のM·H·スピルマンに見せることを約束してくれた。当時スピルマンは人も恐れる，高名な美術評論家であり，編集長でもあった。

5分ほどして，スピルマンが画帳を抱えて部屋に入ってきた。そして，その場でスケッチの何枚かを買ってくれ，持参した全作品を雑誌に掲載してくれることを約束してくれたのである。牧野にとってこれ以上の幸せな話はなかったであろう。これが果たして現実の話なのかどうか，にわかには信じられなかったであろう。心の中はまるで夢物語であったろう。

この機におよんでも，武士道の精神の持ち主の牧野は感情をあらわにすることなく，冷静さを装った。喜びを表す表情さえも少しでも隠そうとした。

だが，スピルマンは卓越した美術評論家の眼で，牧野の心の内の内まで，なにもかもしっかりと見抜いていたのである。このときの牧野とのやりとりをスピルマンは，こう記している。まるで，劇的なドラマの1コマを見ているかのような描写だ。

> A few years ago there appeared in the doorway of my room a young Japanese with a portfolio under his arm. He looked tired and pale, but as he smiled and bowed, difficulty keeping his hands from his knees in Japanese salutation, I was struck with his quiet dignity, his air of self-respect, his lustrious, intelligent eyes. Would I look at his drawings of London? Of London?—yes, willingly. Opening his portfolio, he showed me a bright and luminous drawing of the exterior of Marylebone Church on a warm, moist day, the buildings and the atmospheric effect altogether admirable; the figures, of which there were many, so simple and naive in manner as to suggest a Japanese colour-print. I was charmed with the combination so artlessly and sincerely evolved, and I looked at others—"Reading the Newspapers in the Free Library," "Evening in Trafalgar Square," "Church Parade in the Park," "Night on the Thames Embankment." I promised him I would have them published in *The Magazine of Art*, and I bought one or two: his eyes danced, but no other sign of pleasure did he give—his natural dignity seeming to forbid any marked demonstration of satisfaction.(11)

牧野は絶望の淵に追いやられ，自殺を決意したのだが，スピルマンとの劇的な出会いが契機となって，自分の人生のすべてを絵を描くことに捧げるようになる。日々の糧を求めて，生活そのもののために一時しのぎの仕事をしなくてもいいことを，牧野は何よりも喜ぶ。牧野の類い稀なる画家としての才能を見抜いたスピルマンは，牧野にとってはじめての画文集『ロンドンの色彩』の刊行を約束したのである。

この「画文集」には，スピルマンによる牧野絶賛の序文，牧野自身による刺激的なエッセイ，カラー絵48枚，セピア絵12絵が含まれている。本文は，『ロンドンの歴史』『ロンドンの午後』など多くの著作があり，ロンドン事情に詳しい歴史家の W. J. ロフティーが担当した。

これ以上の豪華メンバーはない。役者がそろったのである。「画文集」は，1907年5月8日に出版されたが，出版されるやいなや売れに売れ一大センセーションを巻きおこし，英国の画壇に風穴をあけることになる。

(注)

(1) 『漱石全集』第18巻「文学論・序」(岩波書店，1979年) p. 13.
(2) *The Colour of London* by W. J. Loftie, F. S. A. Illustrated by Yoshio Markino. with an introduction by M. H. Spielmann, F. S. A. And an essay by the artist. (Chatto & Windus, 1907), p. 25.
(3) *ibid*, p. 38.
(4) 『漱石全集』第24巻「日記及断片・上」(岩波書店，1979年) p. 24.
(5) *The Colour of London*, p. 38.
(6) 希有な水彩画家，牧野義雄を発掘したのは，ロンドン漱石記念館館長の恒松郁生氏である。また，恒松氏は牧野義雄研究の第一人者でもある。ここに恒松氏による牧野義雄研究の業績を紹介し，敬意を表したい。
　私がこの小論を書く気になったのも恒松氏による業績，献身的な研究態度に大いに刺激されたからである。併せて，参考文献として多くの著作を参照させていただいたことにも感謝の意を表したい。

〈牧野義雄の英文による著作の翻訳・画集の編集〉
『霧のロンドン』(サイマル出版会，1991)

『わが理想の英国女性たち』（豊田市教育委員会，1990）
『述懐日誌』（豊田市教育委員会，1991）
『西洋と東洋の比較思想論』（ロンドン漱石記念館，1992）
『ロンドンの日本人画家・牧野義雄』（ロンドンハウス，1990）
『牧野義雄画集・霧のロンドン』（Bee Books, 1992）

〈牧野義雄に関する著作〉
『マイ・フェア・ロンドン』（東京書籍，1993），ピーター・ミルワード氏との共著。
『ロンドンのおいしいいただき方』（徳間書店，1996）「明治のロンドン，平成のロンドン」が収録されている。
『こちらロンドン漱石記念館』（廣済堂出版，1994）牧野義雄に関する言及がかなりある。

(7) Yoshio Markino, *A Japanese Artist in London* (Chatto & Windus, 1910) p. 8.
(8) *ibid*, p. 40.
(9) *ibid*, p. 43.
(10) *ibid*, p. 70.
(11) *The Colour of London*, an introduction by M. H. Spielmann, p. 5.

（まるやま・たかお　商学部教授）